

「パウロ、若者を生き返らせる」

2016年08月11日

使徒言行録 20 章 7 節～12 節。週の初めの日、わたしたちがパンを裂くために集まっていると、パウロは翌日出発する予定で人々に話をしたが、その話は夜中まで続いた。わたしたちが集まっていた階上の部屋には、たくさんのともし火がついていた。エウティコという青年が、窓に腰を掛けていたが、パウロの話が長々と続いたので、ひどく眠気を催し、眠りこけて三階から下に落ちてしまった。起こしてみると、もう死んでいた。パウロは降りて行き、彼の上にかがみ込み、抱きかかえて言った。「騒ぐな。まだ生きている。」そして、また上に行って、パンを裂いて食べ、夜明けまで長い間話し続けてから出発した。人々は生き返った青年を連れて帰り、大いに慰められた。

「週の初めの日」という言葉は印象深い。主イエスが復活した日、即ち、女の弟子たちが主イエスを埋葬した墓に向かった日の早朝を、4 つの福音書は「週の初めの日」という言葉で書き始めている。この日は主イエスが復活した日で、キリスト教が誕生した「主の日」である。教会は、この「主の日」を復活した主イエスを賛美する礼拝日としてきた。ユダヤ教の「安息日」の翌日であるから、日曜日に当たる。

パウロと弟子たちがトロアスで落ち合い、「週の初めの日」を迎え、パンを裂くために集まった。日曜日に礼拝に集まったという、新約聖書唯一の証言である。「パンを裂く」とは、最後の晩餐となった過越の食事の時、主イエスがパンを取り、感謝の祈りを捧げ、弟子たちに裂いて与え、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われた、主イエスの十字架の死を記念するパン裂きである。初代教会において「パンを裂く」ことは、主イエスの十字架によって救いが与えられた感謝の礼拝を意味していた。誰もがパンを食べる「愛餐」の形であっただろう。

パウロは翌日出発する予定で人々に話をしたが、その話は夜中まで続いた。パウロはエルサレムに行けば、ユダヤ教徒から命を狙われることを知っていた。礼拝を共にしている人々とは二度と会えないかも知れないという思いがあった。パウロは惜別の思いを込めて、切々と信仰に励むように訴え、それは長い説教になった。大勢の人々が集まり、階上の部屋には、沢山のともし火が赤々と灯されていた。

エウティコという青年が、窓に腰を掛けて、パウロの説教を聞いていたが、長々と続いたので、ひどく眠気を催し、眠りこけて三階から下に落ちてしまった。パウロは、コリント書(二) 10 章 9 節に「わたしのことを、『手紙は重々しく力強いが、実際に会ってみると弱々しい人で、話もつまらない』と言う者たちがいるからです」と批判されたと書いている。パウロの説教はつまらなくて、眠りこけたのであろうか。説教が長くて、睡魔に襲われたのであろう。

三階から落ちたエウティコを起こしてみると、死んでいた。パウロは降りて行き、彼の上にかがみ込み、抱きかかえて、「騒ぐな。まだ生きている」と言った。パウロの言葉によって、青年は生き返った。使徒言行録 9 章には、ペトロが死んだタビタを生き返らせた奇跡を記している。パウロもまた死人を生かしたと記している。神の力が与えられたパウロを伝えようとしている。人々は青年の蘇生を喜び、慰められた。そして、また階上に行き、パンを裂いて食べ、夜明けまで、パウロは長い説教を続けた。

翌朝、エルサレムを目指し、船出していった。